

B 比爪館跡と周辺の文化財

箱清水石卒都婆群

B⑨ 箱清水石卒都婆群

我が国は、木の文化といわれる。神社仏閣や民家などの木造建築は、世界に類を見ない文化遺産であり、木の文化を象徴している。しかし、環状列石、古墳、庭園、城郭造りなどに代表される石の文化も色濃く残されている。石塔は自然の一部であり、自然の中にあつてこそ石としての霊力が発揮されるものとして、畏敬の対象にされたのだろうか。

五郎沼の北岸に大莊嚴寺跡とされている区画がある。五郎沼を南に臨むような場所に 10 基ほどの板碑（石卒塔婆）が建っている。「箱清水石卒都婆群」と称される板碑群である。

石塔は、五輪塔、宝篋印塔^{ほうきょういんとう}、多宝塔など多数の種類があるが、県内に現存する石塔は、板碑・宝篋印塔・五輪塔に大別される。紫波町では板碑が圧倒的に多く、50 基余が確認されている。その中で、紀年銘（造立年月日）が確認される板碑は、13 基といわれる。

「箱清水石卒都婆群」が建つ一画には、文化財として指定された板碑が 4 基ある。一つが不動明王像が線刻された絵像碑（県指定有形文化財）、残り 3 基が紫波町の指定文化財である。当該地には、これら 4 基の板碑のほか、安政 7 年（1860）の紀年銘をもつ馬頭観音碑と文化 3 年（1806）の紀年銘をもつ五郎沼供養碑が建っている。

紫波町指定文化財になっている板碑のうち、紀年銘が刻まれているのは 1 基だけである。摩耗が進行して判読が困難であるが、鎌倉時代後期の正和 6 年^{しょうわ}（1317）としている（『紫波町史』第 1 巻）。

「箱清水石卒都婆群」の中に、不動明王立像が線刻された不動明王絵像碑がある。鎌倉時代末期の元亨 3 年（1323）4 月 8 日の紀年銘が刻まれている。県内で仏像を線刻した中世の碑の中で、紀年銘を有しているのはこの碑のみである。県内で最も古い絵像碑（像の絵を石面を彫った線で描いた碑）と考えられ、信仰史上極めて貴重な板碑といえる。

鎌倉時代の紀年銘を持つ板碑群の存在は、造立者として大莊嚴寺との関連性が考えられるが、同時に比爪館跡が複合遺跡である事実から、中世にこの地を領有した斯波氏に関係する有力領主（武士層）などが関与している可能性も考えられよう。

鎌倉時代の紀年銘を持つ板碑群の存在から、当該地を大莊嚴寺の跡地として、さらにその創建年代を鎌倉時代とする見解（『紫波町史』第 1 巻）があるが、これは大莊嚴寺の寺域聖地内に板碑が造立され、その造立した年代が板碑の流行した時代と重なったとみるべきであろう。

板碑は、仏の姿や種子^{しゆじ}（仏・菩薩などをあらわす梵字^{ほんじ}）のほか、紀年銘（造立年月日）、

供養者、造立の趣旨、経典の詩文の一部（偈頌=げじゆ）などが彫られる場合が多い。

中世における志波郡における文字資料は極めて少なく、板碑に刻まれた銘文は歴史的に極めて貴重な文字資料となる。板碑が流行する時期は全国的に惣村の成立時期と重なっていることが注目されており、中世における志波郡の郷村制の成立や中世社会の人々の帰依の深さや信仰世界の様相などを知る貴重な資料といえる。